

國學院大學學術情報リポジトリ

「御覽ぜらる」における対者敬語の用法

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高桑, 恵子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000929

「御覽ぜらる」における対者敬語の用法

高桑 恵子

キーワード・御覽ぜらる、対者敬語、自卑敬語、関係規定性、素材敬語

はじめに

「御覽ず」は「見る」の主体敬語動詞である。「見る」の主体敬語には、敬語補助動詞「たまふ」を下接した「見たまふ」もある。源氏物語の地の文では、「人物を御覽ず」と用いる場合に、「御覽ず」の動作主体が、動作客体より上位者であるという関係規定性が認められる。しかし、「見たまふ」にはそうした関係規定性が認められない（高桑恵子二〇一五a）。

- (1) (桐壺帝が、桐壺更衣ヲ)いとどあはれと御覽じて、
……。

(桐壺七・一〇)

のように、「御覽ず」の動作主体（桐壺帝）は、動作客体（桐壺更衣）より上位者であり、関係規定性が認められるが、それに対して、「見たまふ」は、

- (2) この若君（若紫）、幼心地に、（源氏ヲ）めでたき人
かなと見たまひて、……。

(若紫一六九・六)

のように、動作主体（若紫）が動作客体（源氏）より下位の人物であり、「見たまふ」には関係規定性が認められない。主体敬語の「御覽ず」には、受身の助動詞「らる」を接続した受身形の「御覽ぜらる」という形がある。

- (3) (柏木↓女三宮)「……かくおほけなき(私ノ)さまを
(アナタニ)御覽ぜられぬるも、かつはいと思ひやり
なく恥づかしければ、……」(若葉下一一七七・一二三)
このような受身の敬語形は現代語ではほとんど用いられ

ない⁽¹⁾。さらに古典語においても敬語本動詞の受身形は、「御覧ぜらる」以外は、ごく、わずかにしか見られない⁽²⁾。

「御覧ず」の受身形「御覧ぜらる」に対して、「見たまふ」の受身形と考えられる「見られたまふ」という形は存在しない。これに代る形として、「見ゆ」という、受身の意を持った動詞に客体敬語を接続した「見えたてまつる」が用いられている。

(4) (源氏↓夕霧)「……。まめやかに仕うまつり(アナタガ、大宮ニ)見えたてまつれ。……」

(野分八六九・九)

「AがBに御覧ぜらる」も「AがBに見えたてまつる」も、〈見る人〉Bへ敬意が向かうという点で同じである。(3)は、〈見る人〉女三宮に、(4)は〈見る人〉大宮に敬意が向かっている。

「御覧ぜらる」は「見えたてまつる」より敬意の高い表現とされている(中村幸弘・大久保一男・碁石雅利二〇〇二)。しかし、単に敬意の差だけではなく、「御覧ぜらる」は「見えたてまつる」にはない、限定的な用いられ方をする(高桑恵子二〇一五b)。

本稿では、「御覧ぜらる」の特徴的な用いられ方について述べ、さらにそのような特徴をもつ理由を探る。

用例は源氏物語を用い、テキストは『源氏物語大成校異篇』の本文を使用した。巻名・頁数・行数を示し、表記は私意による。

一 発話文の「御覧ぜらる」

源氏物語には「御覧ぜらる」は36例あり、発話文に30例(手紙文も含む)、心内文に3例、地の文に3例で、発話文に偏って用いられている。

本稿では発話文を中心に分析する。発話文の「御覧ぜらる」の「らる」は、すべて受身の意と理解できる。まず、「御覧ぜらる」が用いられる用例(5)～(7)をあげて、「御覧ぜらる」が用いられる発話文の特徴を、①「御覧ぜらる」の主体と客体の人称、②話し手と聞き手の上下関係、③「御覧ぜらる」を含む同一発話内に共起する語、に着目して見ていく。

①「御覽ぜらる」の主体と客体の人称

まず(5)は、明石の君が、娘である明石女御(東宮の女御)に、父入道の願文を託す場面の発話である。

(5) (明石の君↓明石女御)「……、(私ガ)ともかくもは
かなくなりはべりなば、必ずしも、いまはのとじめを
(私ガ、アナタニ)御覽ぜらるべき身にもはべらねば、
なほうつし心失せずはべる世になむ、はかなきことを
も聞こえさせおくべくはべりける、と思ひはべりて。

……。かばかり、と見たてまつりおきつれば、みづか
らも世を背きはべりなむと思うたまへなりゆけば、
……」
(若菜上二一〇一・一)

次に(6)は、病床にある源氏の乳母が、源氏に見舞いをう
けた場面の発話である。

(6) (乳母↓源氏)「(私ハ)惜しげなき身なれど、棄てが
たく思うたまへつることは、ただかく御前にさぶらひ、
(私ガ、アナタニ)御覽ぜらるることの変りはべりな
むことを、口惜しく思ひたまへたゆたひしかど、忌む
ことのしるしよみがへりてなむ、かく渡りおはしま
すを、見たまへはべりぬれば、今なむ阿弥陀仏の御光

も、心清く、待たればべるべき」(夕顔二〇二・二三)
次に(7)は、内大臣が、源氏に、内大臣の妻の娘で行方不
明であった玉鬘が、源氏にりつぱに養育されていたことに
ついて述べている場面の発話である。

(7) (内大臣↓源氏)「ただ(私ハ、アナタノ)御もてなし
になむ従ひはべるべき。かうまで(私ノ娘ガ、アナタ
ニ)御覽ぜられ、あり難き(アナタノ)御はぐくみに
隠ろへはべりけるも、前の世の契りおろかならじ」
(行幸九〇七・三)

(5)・(6)は、「(私ガ、アナタニ)御覽ぜらる」と、「話し
手(一人称)が、聞き手(二人称)に御覽ぜらる」と発話
する例で、(7)は、「(私ノ娘ガ、アナタニ)御覽ぜらる」と
いうように、「話し手の娘(一人称側)が、聞き手(二人称)
に御覽ぜらる」と発話する例である。これらのように、「御
覽ぜらる」はすべて話し手が「私(側)があなた(側)に
御覽ぜらる」と、聞き手に述べる用例に用いられる。³⁾

これに対して、次の(8)のように、「見えたてまつる」に
はそのような人称の制約はない。

(8) (女房↓女房)「……、同じくは、(中ノ君ガ薫ニ) 見え
えたてまつりたまふ御宿世ならざりけむよ」

(早蕨一六七八一―一)

「三人称(中の君)が、三人称(薫)に見えたてまつる」と用いられている。

発話文の「見えたてまつる」の〈見る人〉と〈見られる人〉の人称は様々な人称の組み合わせがあり、「御覧ぜらる」のように、「話し手(一人称)が、聞き手(二人称)に御覧ぜらる」というような、一人称(側)の人物が、二人称(側)の人物から見られる例のみではない。

② 話し手と聞き手の上下関係

(5)では、話し手である明石の君からみて聞き手である明石女御(東宮女御)は身分上の上位者、(6)も、話し手の乳母からみて聞き手の源氏は身分上の上位者、(7)も、話し手の内大臣からみて聞き手の源氏は身分上の上位者でもあり、我が娘を養育してくれたということにおいて心理的な上位者でもある。このように、「御覧ぜらる」を用いるのは話し手からみて聞き手が、身分上の上位者、心理的な上

位者、また他の例にみられる親などの年長者に限られる。これは、関係規定性のある「御覧ず」を「話し手が聞き手に御覧ぜらる」と用いているので、聞き手は上位者に限られるためである。

それに対して、(9)のように、「見えたてまつる」は関係規定性がないので、上位者(薫)から下位者(女房)への発話にも用いられ、話し手と聞き手の上下関係にかかわらずに用いられる。

(9) (薫↓女房)「……、また参りて(私ガ)人々(〃女房達)に見えたてまつらむこともねたくなむ。……」

(総角一六一・五)

③ 「御覧ぜらる」を含む同一発話内に共起する語

「御覧ぜらる」が用いられる同一発話文には、(5)〜(7)にみられるように、下二段「たまふ」と「はべり」が多用される。「御覧ぜらる」が用いられている発話文30例のうち、下二段「たまふ」を用いている例は19例、「はべり」を用いている例は25例である。

これと比べて「見えたてまつる」の用いられる発話文30

例では、それぞれ2例、5例となっており、「御覽ぜらる」は「見えたてまつる」と比べて同一発話での下二段「たまふ」・「はべり」との共起する割合が高くなっている。

このように、「御覽ぜらる」は下二段「たまふ」・「はべり」と共起する割合が高い。そして、一人称主語で用いられ、下位者から上位者への発話に「私ガ、アナタニ御覽ぜらる」と聞き手に敬意が向かうように用いられる。一人称主語で用いられ、聞き手に敬意が向かう点で、「御覽ぜらる」は下二段「たまふ」と同じである。

それゆえ、「御覽ぜらる」は、下二段「たまふ」と共通した聞き手へのへりくだりの性質があるのではないかと考えられる。

二 発話文の「御覽ぜらる」が用いられる場面

発話文に用いられる「御覽ぜらる」がどのような表現とともに用いられているか、またどのような場面で話し手が聞き手に用いているのかを見ることによって、聞き手へのへりくだりが「御覽ぜらる」にあるかを探る。

(3)・(5)・(7)では、話し手は聞き手に、(3)「かくおほけな

き(私ノ)さまを」、(5)「(私ノ)いまはのとじめを(私ガ、アナタニ)御覽ぜらるべき身にもはべらねば」、(6)「(私ハ)惜しげなき身なれど」、(7)「ただ(私ハ、アナタノ)御もてなしになむ従ひはべるべき。……あり難き(アナタノ)御はぐくみに」などの自分を低める表現を用いている。

次の用例の傍線の表現からも、発話における「御覽ぜらる」が、自分(側)を低める表現とともに用いられていることがわかる。

(10) (源氏↓秋好中宮)「思し棄つまじきを頼みにて、(私ノ娘ノ)なめげなる姿を、すすみ(アナタニ)御覽ぜられはべるなり。後の世の例にやと、心せばく忍び思ひたまふる」 (梅枝九八二・四)

(11) (柏木↓小侍従)「まことは、さばかり世になき御ありさまを、見たてまつり馴れたたまへる御心に、数にもあらずあやしき(私ノ)なれ姿を、うちとけて(アナタノ主人デアル女三宮ニ)御覽ぜられむとは、さらに思ひかけぬことなり。……」 (若菜下一一七五・七)

これらの例にあるように、「御覽ぜらる」は、話し手が聞き手に対して自分を低めてへりくだって述べていると思

われる表現と共に用いられている。

次に、「御覽ぜらる」が用いられる(3)・(5)・(7)・(10)・(11)は、話し手が、聞き手に対して、どのような場面で発話しているかを見てみる。

(3)の場面 柏木が、源氏の正妻である女三宮に、会いたくて忍んできた。

(5)の場面 明石の君が、東宮の女御に、自分はあるあなたに臨終を看取られる身分ではないので、今のうちに、父入道の願文を託すと言う。

(6)の場面 乳母が、源氏に、病氣の見舞いをうける。

(7)の場面 内大臣が、源氏に、行方が分からなくなつた娘を養育されていた。

(10)の場面 源氏が、秋好中宮に、娘の明石姫君の腰結の役を依頼する。

(11)の場面 柏木が、小侍従に、源氏の正妻である女三宮に会わせてほしいと懇願する。

これらは、話し手が「御覽ぜらる」という行為をへりくだって聞き手に述べていると思われる場面である。

このように、「御覽ぜらる」は、相手より自分を低めて

話し手が聞き手に述べる表現、場面で用いられることから、下二段「たまふ」のような聞き手へのへりくだりを表わす対者敬語の性格を持つていと思われる。

いっぽう、次の「見えたてまつる」の例は、聞き手(夕霧)に対して、話し手(源氏)が、「祖母である大宮に孝行して、見られ申し上げなさい」と述べていて、聞き手に対してへりくだつた態度では述べてはいない。

(12) (源氏↓夕霧)「(大宮ハ)いまいくばくもおはせじ。

まめやかに仕うまつり(アナタガ、大宮に)見えたてまつれ。……」(野分八六九・九)

三 中古の対者敬語と「御覽ぜらる」の共通点

聞き手へのへりくだりを表す対者敬語にはどのようなものがあるかを見てみる。

まず、中古の敬語については様々の分類が多くの研究者によって示されてきた。辻村敏樹(一九六三)は、表現素材に関する「素材敬語」と、対者への慎みの気持ちを表わす「対者敬語」の二つに分けた分類を提示した。⁴⁾

中古に用いられた対者敬語には、「はべり」のように主

語の人称に制限のないものと、下二段「たまふ」「まかる」「まうでく」「申す」「まかづ」「承る」のように主語が一人称（側）という制限のあるいわゆる自卑敬語とされるものがある。そのため、ここでは前者を丁寧語（丁寧語）に、後者を謙讓語Ⅱに分類して考えてみる。

すると後者の謙讓語Ⅱに属す語と「御覽ぜらる」とには共通点があると思われる。

下二段「たまふ」は、一人称（側）の人物にのみ用いられるという点で、発話文に用いられる「御覽ぜらる」と共通している。

(13) (10) (源氏↓秋好中宮)「……、(私ノ娘ノ)なめげなる姿を、すすみ御覽ぜられはべるなり。後の世の例にやと、(私ハ)心せばく忍び思ひたまふる」

(梅枝九八二・四)

(13)は話し手(源氏)が、聞き手(秋好中宮)にへりくだって述べている。

「申す」は、地の文にも発話文にも用いられ、素材敬語と対者敬語の両方の用法を持っている点で、「御覽ぜらる」と共通している。

次の例のように、「申す」は地の文においては、下位者(惟光)が上位者(源氏)に言う、という関係規定性をもった客体敬語である。

(14)「……」など(惟光ガ、源氏ニ)申す。

(夕顔一三二・一四)

しかし、次の発話文の「申す」は、隨身から源氏へのへりくだりを表わす対者敬語である。

(15) (隨身↓源氏)「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。……」

(夕顔一〇一・一四)

「申す」は、(14)のように、地の文においては素材敬語であり、(15)のように、発話文においては対者敬語として用いられることがある。このように、「申す」は、関係規定性をもつ客体敬語としての用法と、発話文に用いられて対者敬語の働きをする用法とがある。

発話文にのみ用いられる下二段「たまふ」と違って、このように対者敬語には、素材敬語としての用法をもつ語がある。

「御覽ぜらる」も地の文では、次の例のように、主体敬語「御覽す」の受身形の素材敬語である。

(16) ……うるはしくものしたまふ君（『夕霧』にて、三条宮と六条院とに参りて、（夕霧が、大宮卜源氏ニ）御覽ぜられたたまはぬ日なし。
（野分八六六・九）

「御覽ず」は敬意が「大宮と源氏」に向かう主体敬語であるが、「御覽ず」に受身の「らる」を接続した「御覽ぜらる」のまとまりでみると次のように、客体敬語相当として働いて「大宮と源氏」に敬意が向かっていると考えられる。

主体	客	体	客体敬語相当
夕霧が、	大宮と源氏に		御覽ぜらる。

このように、「御覽ぜらる」というまとまりでは、「見られる人」が主体になり、見る人が客体になる客体敬語相当の働きがあると考えられる。

そして「御覽ぜらる」は、「下位者が上位者に御覽ぜらる」という関係規定性もある。

これらの例に見られるように、「御覽ぜらる」は、話し手主語で用いられる点で、対者敬語の下二段「たまふ」と

共通する。また、「御覽ぜらる」は、主体と客体の間に関係規定性があり、素材敬語で用いられる例がある一方、話し手主語で対者敬語として用いられる例がある点で対者敬語の「申す」と共通している。

四 「御覽ぜらる」が対者敬語として用いられる理由

「御覽ぜらる」に表れるへりくだりの意は何によって生じるのかを考えてみる。

「申す」のように関係規定性のある客体敬語を発話文で用い、かつ、主体は話し手側、それを受ける客体が聞き手側という場で用いると、客体である聞き手に敬意が向かう。そのために、本来は客体敬語ではあるが、この環境下では、客体敬語の敬意が向かう人物は、対者敬語において敬意が向かう聞き手と同一人物になる。さらに関係規定性があるため、聞き手は話し手より上位者になり、話し手は聞き手に対してへりくだる気持が生じる。つまり、発話文で、話し手から聞き手への動作に、関係規定性がある客体敬語を用いると、聞き手に敬意が向かい、対者敬語になると言える。

中古の対者敬語（自卑敬語）は、「申す」・「承る」など
客体敬語由来の語ばかりで、主体敬語由来の語は知られて
いない。しかし、主体敬語由来の「御覧ぜらる」が対者敬
語の用法をもつのは次のような理由だと思われる。

つまり、「御覧ず」という主体敬語に受身の助動詞が接
続した、「御覧ぜらる」で、客体敬語相当の働きをする関
係規定性がある語とみなすことができる。そのため、客体
敬語由来の対者敬語と同様に対者敬語の用法が生じると言
える。

例えば、話し手（A）が、聞き手（B）に、「CがDに
御覧ぜらる」と発話する発話文を考えると、次のIのよう
な構文になる。

I (A↓B)「Cが、Dに、御覧ぜらる」

まず、「御覧ず」には関係規定性があるので、Cは下位者、
Dは上位者になる。次に、「御覧ぜらる」という主体敬語
+受身で、客体敬語相当の働きをする。さらに、話し手（A）
から「御覧ぜらる」の客体相当（D）に敬意が向かう。し

たがって、Iの文では、「御覧ぜらる」は話し手（A）か
ら客体（D）に敬意が向かう素材敬語と考えて問題なく、
話し手（A）から聞き手（B）に敬意が向かうわけではな
い。

しかし、実際の発話文の「御覧ぜらる」は、「話し手が
聞き手に御覧ぜらる」と発話する場合にだけ用いられる。
つまり、C⇐A、かつ D⇐B の場合に限られた用い
られ方だけである。するとIは次のよう捉えられる。

II (A↓B)「私(A)が、アナタ(B)に、御覧ぜらる」

関係規定性があるので、A（私）は下位者、B（アナタ）
は上位者になり、話し手（A）から、「御覧ぜらる」の客
体相当のアナタ（B）に敬意が向かう。つまり、話し手（A）
から聞き手（B）に敬意が向かうことになり、対者敬語の
用法になる。

「話し手（A）が、上位者である聞き手（B）に御覧ぜ
らる」という行為を、話し手が聞き手に述べているので、
へりくだった意味が生まれると考えられる。もし、Iのよ

うにC・Dの人称に制限がなく発話文中の「御覽ぜらる」が用いられるとしたら、すべて「御覽ぜらる」は「見えたてまつる」のように素材敬語である。しかし、実際は、IIのように、人称が限定して用いられる。このように「御覽ぜらる」はC・Dに他の人称の組み合わせが存在せずに、発話文のすべての「御覽ぜらる」の用例が、話し手(側)から聞き手(側)への動作にのみ用いられている。もし、「御覽ぜらる」が「見えたてまつる」と同じように素材敬語であるのなら、このような人称の制限がなぜあるのかの説明がつかない。これは、「御覽ぜらる」が対者敬語としての用法を持っているからである。

まとめ

関係規定性をもつ主体敬語「御覽ず」の受身形である「御覽ぜらる」は、地の文では、素材敬語として用いられる。発話文では、A(私)は下位者、B(アナタ)は上位者で用いられ、

・(A↓B)「私(A)ガ、アナタ(B)ニ、御覽ぜらる」

と、下位者である話し手から、上位者である聞き手への発話に、人称が限定されて用いられる。

「御覽ぜらる」で客体敬語相当の働きをし、話し手からの敬意は、「アナタ」(B)に向かうため、聞き手(B)に向かうことになる。したがって、「御覽ぜらる」は発話文では対者敬語(謙讓語II)の用法をもつ。

〔注〕

(1) 小田勝(二〇一五)「受身文の敬語形は、現代語ではほとんど用いられない」(五七四頁)。

(2) 「思しめさる」「聞しめさる」「知ろしめさる」など。

(3) 「(側)の人物」の例は、その人物の子の例(7)・(10)・(13)・若菜上九〇七・三・若菜下一二一九・五、その人物の主人の例(夕顔一三九・七・若菜下一一七五・七・若菜下一二二四・一二)、その人物の親の例(匂宮一四三九・六)である。

(4) 辻村敏樹(一九六三)では、「素材敬語」・「対者敬語」の用語は現代語と古典語の両方に用いている。古典語の

素材敬語の例として「のたまふ」・「行きたまふ」など、
対者敬語の例として「候ふ」があげられている。

〔引用文献〕

小田勝（二〇一五）『実例詳解 古典文法総覧』和泉書院

高桑恵子（二〇一五a）「御覧ず」の関係規定性―源氏物語に

おける―』『國學院雜誌』第一一六卷九号

高桑恵子（二〇一五b）「源氏物語の「御覧ぜらる」と「見え

たてまつる」』『解釈』第61卷11・12月号

辻村敏樹（一九六三）「敬語の分類について」『言語と文芸』

二七号

中村幸弘・大久保一男・碁石雅利（二〇〇二）『古典敬語詳説』

右文書院